



成熟社会を創っていくのは “看護力”であることを伝えたい

——「やりがい、いきがい。たかがい！」を
キーワードにナースをつなぐ

たかがい 恵美子 さん Takagai Emiko

参議院議員（自由民主党 比例代表選出）／前・日本看護協会常任理事

埼玉県立衛生短期大学、同専攻科地域看護学専攻、国立公衆衛生院専攻、東京医科歯科大学医学部保健衛生学科、同大学院医学系研究科博士課程〔保健学修士〕。WHOエイズコントロールケア研修修了。病院、宮城県（保健所、精神保健福祉センター）、東京都老人総合研究所、結核予防会結核研究所、東京医科歯科大学ほかで看護を実践する。中央アフリカ共和国でのHIV感染予防の教育活動にも参加。厚生労働省看護技官を経て、日本看護協会常任理事。2010年7月参議院議員に初当選。

「これからどんなことができるんだろうと、いつもワクワクしています。真っ白なキャンバスに“絵”を描いていくような仕事をしていきたいんです」

華のある人だ。声もよく通る。新人議員として初々しさを感じさせるとともに、すでに政治家としての自信もうかがえる。

たかがい（高階）恵美子さんは、2010年7月に行われた参議院議員選挙において初当選を果たした。実は、その1年前までは、日本看護協会常任理事として、本誌『コミュニティケア』の編集委員も務めていただき、特集企画など貴重なご意見をいただいていた。

「看護」と出会ったおかげで、今まで本当にたくさんの方に会い、

そのときどきに、いろいろな知恵を授けていただきました。選挙までの間は、それを一層強く感じましたし、このことが、今の私を支えてくれていると感謝しています」

と話したたかがいさん。確かに、今まで携わってこられた仕事は多岐にわたっている。病院・保健所・大学・行政、そして職能団体……。しかし、そのどれもが“看護”の実践の場であり、ベースは保健師としての“高階恵美子”さんだ。

保健師の国会議員として “家庭訪問”を展開

今、看護職の国会議員として新たな挑戦が始まっている。

当選してすぐ、たかがいさんに、自由民主党女性局長の石井みどり議

員から「女性局長代理になって！」と電話があった。

「そんな、私は新人ですから、と固辞しましたが、石井先生に“どうしても！”とおっしゃっていただき、“看護”を知っていただくいい機会かな、とも思って、お引き受けすることにしました」

さらに、たかがいさんは自民党政務調査会の厚生労働部会にある「看護問題小委員会」の副委員長に就任する。委員長は、自民党シャドウ・キャビネットの厚生労働大臣でもある田村憲久議員。そして、もう1人の副委員長を同じ看護職である、あべ俊子議員が務める。

「看護問題小委員会は、このところ年に数回“予算をどう考えていくか”などが話し合われる場となって

いました。私はこれを具体的な政策提言をする場として活性化したいと思いました。ですから定期的に開催すること、そして、最も優先する課題として「穏やかな最期を保障するコミュニティづくり」をテーマにして話し合いたいと申し入れました」

たかがいさんのねらいは、国会議員の方たちに「問題意識」を持ってもらうこと。これからは「働き手」の数がどんどん減っていく時代を迎えるが、この世代の人たちこそ、自分の夢をかなえたい、子どもを生み育てたいと望んでいる。この人たちを支援しないと社会は活性化しない。では、どうするか？

「急激に増えていく高齢者世帯を地域で「最期までみる」という安定した支えが必要です。それがひいては、子育て世代を支えることにつながります。家族が最期まで家族として機能できるよう、家庭内に生じる看取りなどの負担を「地域単位」で補うという発想で、制度設計を行うべき。それが「政治」の課題です。命の最前線で日本の社会保障を実現している最大規模のプロ集団、それは140万人の「看護職」です。だからこそ、「私たちが高齢者を最期までみる」という覚悟を決め、歩み出すことが必要だと考えています。求められる地域づくりを実現するため

に、このことを、まずは政治家の皆さんに知ってほしいと思いました」

そして、たかがいさんは「看護問題対策議員連盟」（看護連）を通して、その目的に向かって走り始めた。顧問は森喜朗元首相、会長が伊吹文明議員、事務局長をあべ議員、事務局次長をたかがいさんが務める。

看護問題小委員会を勉強中心の思考の場とする一方、看護連は視察や体験学習を通して実際の現場を見て理解を深める場だ。たかがいさんは看護連の所属議員に声をかけ、2010年12月20～21日には、横浜市と千葉県松戸市で訪問看護ステーション・療養通所介護事業所・在宅所・グループホームなどを見学した。

「活動を活発にするため、もっと数を増やしたい！ そう思って、私は「家庭訪問」することにしました。やっぱり、保健師ですからね（笑）」

家庭訪問とは、衆議院・参議院の議員会館にある各議員の部屋を直接訪問すること。2回まわって看護連への参加を呼びかけ、反応のあまりよくない議員にはさらに1回。その結果、入会していない衆議院議員はわずか4人だけとなった。

「看護連が大きな組織となって活動すれば、興味を示してくれる議員も増えます。そして、現場を実際に見て理解する機会を提供する。それ

に参加した議員は地元に戻って、「看護」のことをPRしてくれるようになるはずですよ」

看護職の“スピーカー”を募ってつなぐ“パイプ役”

最後に、本誌元編集委員として、読者の皆さんへ応援メッセージをいただいた。

「特に地域で活躍されている訪問看護師さんや施設の看護職の皆さんに、先ほどお話しした“覚悟”ができる過程で、きっと“今、足りないものは何か”“使い勝手の悪いところはどこか”などを、よりクリアに語っていただけるようになると思っています。地域には地道に“看護”を展開している仲間がいっぱいいて、そこから看護の歴史が培われ、地域の人たちを支えています。そういう方を“スピーカー”として募り、声を発信していただきたい。私はその方たちをつなぐ“パイプ役”になりたいと思っています。ぜひ、今感じていることやアイデアを伝えていただきたいですね」

読者の皆さんも自分の“やりがい”や“いきがい”を、下記ホームページにアクセスして、“たかがい”さんに訴えてみてほしい。それは、在宅・施設の看護を変えていく一歩となるに違いない。